

# 漆(うるし)の魔力

平成二十三年二月二六日

国立歴史民俗博物館

平川南

NO. 1



漆の樹(ウルシノキ)

ウルシノキ(樹齢約10年)

漆は、ウルシノキ(漆の樹)の樹液である。幹や枝の表層部に傷をつけると、にじみ出たのち固化する。漆は、空気に触れると、ラッカーゼによる酵素反応で徐々に硬化する。その反応には、高温多湿を必要とする。漆は、樹勢を守るために出る。したがって、木の成長の盛んな夏場を中心にして、漆は分泌される。"夏"は、漆の活躍する季節である。漆の文化は、夏に特徴づけられ、夏に規制される。



漆製法の図(『日本山海名物図会』)



## 生漆産地

丹波	吉野	相模足柄
越後岩船	武蔵秩父	上野南甘楽
常陸那珂	下野那須	三河南設楽
甲斐南巨摩	美濃郡上	飛騨吉城
信濃下伊奈	陸奥三戸	陸奥南津軽
羽後山本	羽前南村山	加賀石川
能登鳳至	越中砺波	越前今立
因幡智頭	備中川上	安芸高田
紀伊那賀	阿波美馬	伊予宇摩
豊後日田	日向北諸県	薩摩鹿兒島

石井吉次郎・一戸清方

『実用漆工術』

## うるし千ばい朱千ばい

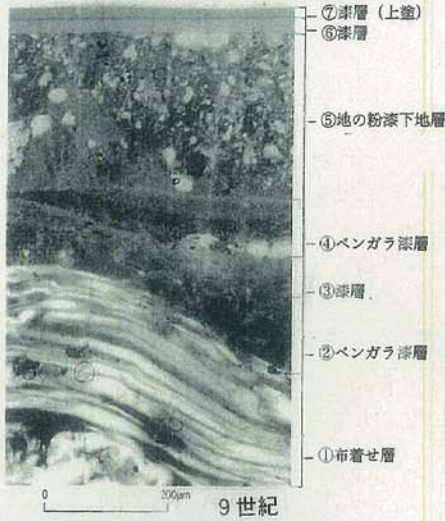
うるし千ばい 朱千ばい  
 くわ千ばい 黄金千ばい  
 朝日の映す 夕日かがやく  
 雀の三おどり半の 下にある  
 『しもつけの伝説』第一集

手製の道具袋を腰に下げ、掻き棒を手につつ。カンナの爪の部分には独特のR形。カンナでキズをつけ、漆の滴をへらで掻きとり、樽に入れる作業は微妙な力加減と速さが要求される。「ただキズをつけりゃいい、漆をとればいいってもんじゃやない」と大森さん。地面に一番近い下の掻きキズは、キズが上と下の両方に向かう「鼓掻き」の部分。これも漆の性格を踏まえた方法。

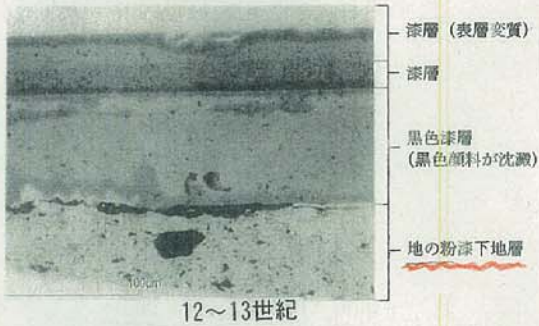




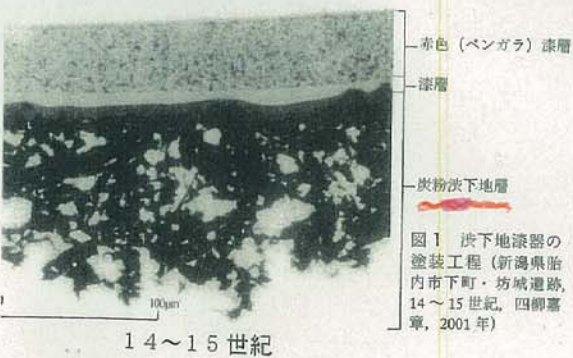
石川県戸水大西遺跡漆革箱の  
塗装工程



福井県家久遺跡漆手箱の塗装工程



新潟県坊城遺跡洪下地漆器の塗装工程



古代・中世の漆塗技術の分析

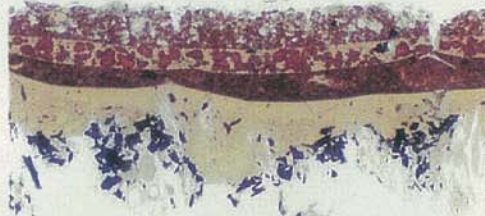
縄文時代の優れた漆塗装技術

—後期の木胎漆器・北江古田遺跡—

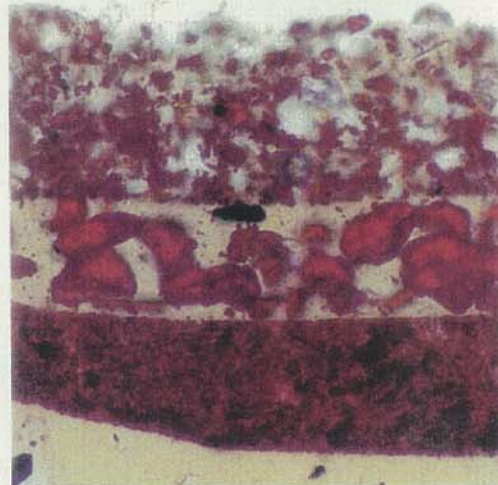
縄文時代の人々は、漆と赤色顔料の性質を熟知していた。  
所蔵/中野区立歴史民俗資料館



1 朱漆塗木胎漆器片



2 同資料の漆層断面



3 三層からなる赤色漆

出土した縄文時代の漆の木と漆要具

—下宅部遺跡(漆の木・漆液容器・指紋)、是川遺跡(漆漉し布)—

縄文時代の漆採取傷を残す漆の木は、低湿地遺跡の杭列に使用されていた。  
所蔵/東村山市教育委員会・八戸市教育委員会



1 下宅部遺跡出土の漆の木(杭)



2 漆の木に残された掻き傷



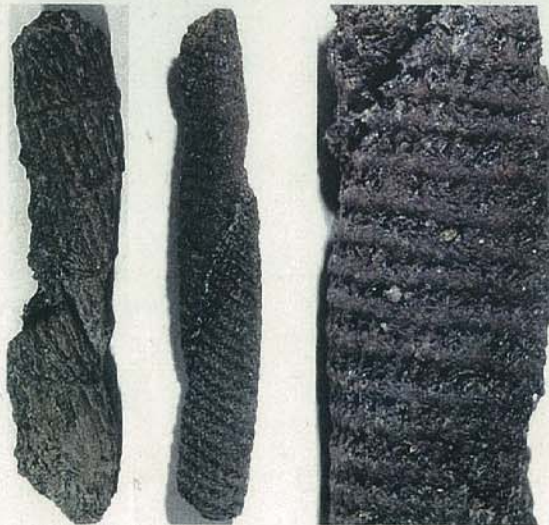
3 にじみ出た漆液



4 下宅部遺跡の漆液容器



5 指紋汚れ

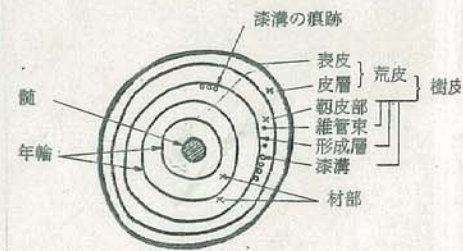


6, 7 是川遺跡の漆漉し布



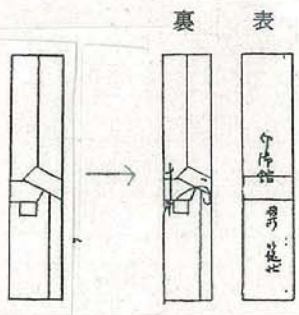
8 同布(7)の布目

ウルシノキの茎(幹)の断面図



注: 形成層が外側と内側に分裂発達し、外側は韌皮部となり、内側は材部となる。漆液溝は篩管部に維管束と平行してつぎつぎと形成されるが、形成層の内側に分裂した材部にも既存の漆液溝の痕跡がみえる。





釈文



勘収釜壹口 在南大室者

□□若有忘怠未収者乞可  
令早勘収随恩得便付国□□

□縁謹啓

五月六日卯時自蛭形驛家申

竹田継□

介御館

務所 竹継状

封 □

秋田城跡出土漆紙10号文書

一二五〇年前地方の役人が  
出張先から役所に出した手紙

第一〇号文書 写真 (赤外線テレビカメラ)

漆掻き・クロメ漆・漆蓋紙 (漆紙)



漆掻き



掻き傷からしみ出た漆液



漆掻き傷 (殺し掻) とウルシの木の木口面



生漆を入れた桶樽  
採漆を終え、嚴重に梱包された。



天日によるクロメ作業  
生漆を舟形容器にあげ、半日近くゆっくりと攪拌し続ける。



クロメ漆を入れた曲げ物容器と蓋紙 (反故紙の利用)



漆液の付き方 NO. 3